

このFAX通信は字数に限りがありますので先号では少し抽象的な無縁社会になってしまいましたが、今回も続けることによって身近な経験を添えて書いてみました。

永六輔がベストセラー「大往生」の中に「昔は町内で自分の子も他人の子も分け隔てなく面倒見て育てたものでした。善い事をすれば日頃はおっかないおばさんが皆の前で大きな声で褒めてくれた。悪いたずらがバレると親方が陰へと呼んで「お前は本当は良い子だから2度とするなよ」と諭してくれたものでした。叱る人がいて、それをなだめる人がいて、お年寄りがそっと諭す・・・と言う町内の子供達を育てる仕組みが出来ていた。やがてこの子供達は世の中へ出て行って淋しさ、悲しみ、悩みや辛さにつづった時、いつもふるさとの町内の人々を思い出して頑張り成長してきたのでした。」とあります。

今、そのふるさとの商店界が無くなろうとしています。

かつて君津駅の商店界にはラジオ屋のおじさん、おばさんがいて、食堂のおかみさん、肉屋のおばさん、時計屋、薬局、自転車預かり所のおじさん、床屋さん、魚屋、八百屋のおじさん、おかみさん、下駄屋のおばあちゃん、洋品屋さん、駄菓子屋さん、米屋さん、パーマ屋さんもありました。

行き帰りの人達はお互いによく声をかけ合い、立ち話にはぎやかな集合空間を作っておりました。悪童と言われて育った私などは、近所のオヤジさんや先生にこっぴどく叱られ、時に殴られもしましたが恨むより、叱られたことに親近感を感じ、不思議と年をとるごとに近づきたい良い思い出として残っております。

九州や東北等の方々には盆暮れにふるさとの町へついた時、忘れていたふるさとのぬくもり、匂いを懐かしく感じられる事が多いと思います。今そのふるさとが無くなろうとしております。無縁社会の人々は帰るふるさとがもう無くなってしまったからであります。

私達は働く場所を求めて競争社会の中へと出て行った子供達が、疲れて帰ってきた時、ほっと心を休められる町を守る役目を、もう一頑張りしなければなりません。そうでなければこの町もまた無縁社会となってしまふからであります。

商店、商店界とは簡単に考えれば仲介業であります。生産者から消費者へ、町内の幸不幸の情報伝達、昔は悩み、相談事は町内の旦那達へと行ったものですが、今の町内に旦那衆（リーダー）がいなくなってしまうのも商店界衰退の問題点であります。

町づくりとは人づくり、仲間づくりと唱えて会頭職を8年間続けて参りました。

県下、他市から見れば君津はすばらしいと褒めて下さいます。会員占有率、自己財源率、事業量、相談件数、自主財源・・・女性会組織率では全国上位であります。町が良くなるのも企業、商店、商店会が良くなるのもすべて人、リーダーとその仲間達であり、その心を支えるものは、家族愛、郷土愛、連帯感であります。共に生きるための犠牲心もかせない要素であります。経済は国や政治に依存し是非を問うのではなく、自ら夢を描き、希望を捨てないことでもあります。